

長野県の高校運動部活動の継続に関する調査と考察

長野県高等学校体育連盟

長野高校 武居 正憲 松代高校 小林 伸広

小諸高校 上原 秀生 伊那北高校 小出 茂樹

松本蟻ヶ崎高校 大谷 雅亮

I はじめに

学校教育の一環として行われている部活動は、様々な困難を抱えている。第1に急激に進行する少子化の影響による部員の減少、第2に教員の削減・高齢化の進行による指導者不足、第3に専門的知識を持った指導者の確保の難しさと教員の異動に伴う運動部継続の困難、第4に部活動が法的・制度的に曖昧なために諸々の問題を引き起こしていることなどである。このような困難とともに働き方改革も叫ばれ、2018年3月にはスポーツ庁から「部活動ガイドライン」が示される。「部活動が変わらざるを得ない、変わらなければならない時代」に突入しているといっても過言ではない。

ここでは、第1に示した「少子化」の影響による部員の減少に着目して長野県の事例をみてみたい。

2017年度の学校基本調査¹⁾によれば、高校生(全日制・定時制)の生徒数は58,156人であり、年々減少傾向である。本連盟の対象となる生徒数には通信制の生徒も含まれるのでこれとは異なるが、本年度は59,665人(登録者24,642人)を予測している。

本連盟では、学校基本調査および長野県人口異動調査などをもとに将来推計をしており、長野国体が予定される2027年度には53,465人(22,336人)、長野県中心開催のインターハイが予定される2031年度には51,569人(21,544人)へと急激な生徒数(登録者数)の減少を予測している。

平成28年度の本連盟および県教委実施の運動部活動調査²⁾によれば、全日制高校の運動部加入率は、公立51.3%(男子65.9%、女子35.5%)、私立43.6%であり、ここ数年はさほど変化がない。むしろ平成10年台よりも数値は高い。しかし、少子化により生徒数が減少していること、中学校の加入率が58.9%(男子69.9%、女子47.2%)と過去最低で、平成10年度の66.8%(男子79.1%、女子53.9%)から減り続けていることは、高校での部員数減少の大きな原因にもなっている。自由記述式の回答からは、部員数の減少(特に女子部員の減少)および顧問の負担についての記述が多い。また、ここ数年、高校の運動部員数は中学よりも1万から1万2000人少ない。

運動部加入数が減少しているとはいえ、公立の中学生が地域のスポーツクラブで活動する割合³⁾は、男子9.4%、女子4.5%と少なく、今でも部活動は青少年に運動やスポーツの実践を提供する最大のものである。一部の競技を除き、競技力向上も教員の熱意によって支えられている。

ただし、学校教育の一環である部活動の目的が競技力

向上のみとなってしまうことには、勝利至上主義に繋がるという点で否定的な意見も多い。森田⁴⁾は、学校教育に競技力向上という一元的な序列が持ち込まれることによって、スポーツ経験が本来持っているはずの豊かな可能性が損なわれ、大部分の児童・生徒が阻害される状況が招来されると述べている。

様々な考え方はあるが、本連盟としては、学校教育の目指す全人的発達という視点からみた部活動の教育的意義を念頭におきながら、加入者を増やすための運動部活動のあり方を調査・研究することが団体の使命である。その結果として、部活動や主催大会がより多くの生徒たちに貴重な経験を提供する場となり、生涯スポーツの獲得や競技力の向上にもつながると考えている。

部活動については、今日までに多くの先行研究が行われている。例えば、教育的効果や意義を認める研究、学習面やメンタルヘルスへの悪影響を指摘する研究、退部や継続に関する研究、顧問や外部指導者に関する研究などが挙げられる。

本連盟や県教委では、毎年部活動調査を実施しているが、統計値の年次推移を観るに留まり、生徒の運動部活動に係る背景や意識の分析には至っていない。

以上のことから、本調査では、中学校から高校への運動部活動の継続に焦点を当て、中学校で運動部活動に加入していた高校1年生を対象に、中学校での運動部活動の実態および高校での運動部活動の継続状況等を調査した。その結果を分析して運動部活動の継続に影響を与える要因を明らかにし、加入者を増やすための運動部活動のあり方を検討することとした。

得られた結果を、専門部、運動部活動の顧問あるいは中体連などに情報提供し、運動部活動の活性化や競技力向上のための一助とするものである。

II 調査対象および調査方法

1. 調査対象

長野県内の県立高等学校計27校(北信:6校、東信・南信・中信7校)に在籍する1年生のうち、中学時に運動部活動に加入していた生徒1,127名を対象とした。なお、各地区ともに、いわゆるA校、B校、C校が含まれるように配慮した(表1)。また、スポーツ強豪校と呼ばれる学校は含まれていない。

対象者の中学時の加入部活動は表2のとおりである。

表1 校種・性別調査対象(人)

	男子	女子	合計
A校	164	115	279
B校	222	195	417
C校	230	201	431
合計	616	511	1127

表2 調査対象者の中学時加入部活動(人)

分類	加入部活動	男子	女子	合計
個人的 スポーツ	ソフトテニス	77	116	193
	卓球	47	51	98
	陸上競技	57	41	98
	剣道	35	13	48
	柔道	10	3	13
	水泳	12	12	24
	バドミントン	10	20	30
	スキー	3	0	3
	スケート	0	5	5
	ボート	2	0	2
	テニス	4	2	6
	相撲	1	0	1
	集団的 スポーツ	カーリング	1	0
軟式野球		81	1	82
バレー		53	127	180
バスケット		100	102	202
サッカー		114	5	119
ソフトボール		1	8	9
ハンドボール		1	2	3
アイスホッケー		1	0	1
その他	6	3	9	

2. 調査方法

質問紙法による。あらかじめ用意した質問紙を対象の学校に配布し、2017年(平成29年)6月から8月に調査を行い、回答を求めた。

3. 調査内容

(1) 性別、中学校での加入運動部活動、高校での運動部活動継続状況

(2) 中学校での運動部活動について

- ①入部のきっかけ
- ②入部理由
- ③1週間の活動日数
- ④平日の活動時間
- ⑤休日の活動時間(大会以外)
- ⑥試合への出場の有無
- ⑦出場・参加した最高規模の大会
- ⑧運動部活動の楽しさ
- ⑨運動部活動の効果(身体・精神・行動・学習)
- ⑩運動部活動で経験した悩み
- ⑪家族の理解

⑫運動部活動で被った怪我や病気の有無

⑬運動部活動の満足度

(3) 高校での運動部活動

- ①中学と同じ競技を継続している理由
- ②中学と異なる競技を継続している理由
- ③運動部活動を継続していない理由
- ④運動部活動の満足度を高めるために必要な事項

4. 分析方法

クロス集計表を作成してカイ二乗検定(独立性の検定)を行い、1%および5%水準を棄却域として2つの変数に関連があるかを検定した。

Ⅲ 結果および考察

1. 高等学校での運動部活動継続の状況

(1) 全体

高等学校で運動部活動を継続している生徒は全体の70.8%(男子:75.0%、女子:65.7%)である。(表3)平成29年度8月現在の(公財)全国高体連加盟・登録状況⁵⁾によれば、全日制高校の登録率(全国高体連設置専門部と設置専門部以外、高野連含む)の全国平均は43.5%(男子:58.6%、女子28.2%)、長野県は49.7%(男子66.5%、女子32.3%)である。

高校での運動部継続率を現状より上げることができれば、登録率の上昇に繋がる。

(2) 性別からみた継続の状況

男子の46.4%が中学と同競技を継続しているのに対して女子は37.9%、男子の23.8%が運動部を継続していないのに対して女子は33.7%となった。(表3)

男子は同競技継続率が高く、女子は運動部非継続率が高いという有意な性差がみられる。

このことについては、後段で分析する。

表3 性別からみた継続状況(%)

	P<0.01				
	同競技	異競技	非継続	クラブ	合計(n)
男子	46.4	28.6	23.8	1.2	604
女子	37.9	27.8	33.7	0.6	496
計	42.5	28.3	28.3	0.9	1100

※クラブ:クラブチーム

(3) 競技分類別にみた継続の状況

表4 競技分類別にみた継続の状況

	P<0.01				
	同競技	異競技	非継続	クラブ	合計(n)
個人的 スポーツ	37.3	29.4	32.0	1.4	510
集団的 スポーツ	46.9	27.5	25.1	0.5	582

中学校での集団的スポーツ実施群の 46.9%が同競技を継続しているのに対して個人的スポーツ実施群は 37.3%、個人的スポーツ実施群の 32.0%が運動部を継続していないのに対して集団的スポーツ群は 25.1%となった。(表 4)

集団的スポーツ実施群は同競技継続率が高く、個人的スポーツ実施群は運動部非継続率が高いという有意な差がみられる。この結果は、池上⁷⁾の研究結果とも一致している。

(4) 中学校運動部活動にみた継続の状況

表5 中学校運動部活動別にみた継続の状況(%)

	P<0.01				
	同競技	異競技	非継続	クラブ	合計 (n)
ソフトテニス	31.7	34.9	32.8	0.5	189
卓球	35.7	23.5	38.8	2.0	98
陸上	49.0	25.0	25.0	1.0	96
剣道	31.9	29.8	38.3	0.0	47
柔道	30.8	46.2	23.1	0.0	13
水泳	23.8	52.4	23.8	0.0	21
バドミントン	56.7	3.3	36.7	3.3	30
スキー	0.0	100.0	0.0	0.0	3
スケート	60.0	0.0	0.0	40.0	5
ボート	100.0	0.0	0.0	0.0	2
テニス	40.0	40.0	20.0	0.0	5
相撲	0.0	0.0	100.0	0.0	1
カーリング	0.0	100.0	0.0	0.0	1
軟式野球	45.7	38.3	16.0	0.0	81
女子バレー	44.3	25.4	30.3	0.0	122
男子バレー	46.2	25.0	28.8	0.0	52
女子バスケット	42.0	23.0	35.0	0.0	100
男子バスケット	51.5	25.8	22.7	0.0	97
サッカー	53.8	23.9	19.7	0.0	117
ソフトボール	0.0	87.5	12.5	0.0	8
ハンドボール	100.0	0.0	0.0	0.0	3
アイスホッケー	0.0	100.0	0.0	0.0	1
その他	62.5	12.5	25.0	0.0	8

標本数 50 以上の部活動でみると、サッカーは同競技継続率が 53.8%と最も高く、非継続率が 19.7%と低い。これは、サッカー人気の影響や地元プロサッカーチームがあり、子どもたちがレベルの高い試合を見ることができ、クラブによる地域の学校等への巡回活動など地道な地域貢献活動の影響があると予想される。

栃木県教育委員会スポーツ振興課が行った平成 28 年度中学校・高等学校運動部に関する調査⁷⁾によれば、中学校の運動部加入率は、地域スポーツクラブなどへの加入率が年々高まる影響もあり、3 年連続で低下しているとしている。一方、高校の運動部加入率は 44.5%と前年度を上回り、昭和 49 年度の調査開始以来 5 年連続で過去最高を更新し、男子は 55.0%、女子は 33.3%で共に過去最高と報告している。部員数の多い競技は、高校男子は、1 位:

サッカー、2 位:硬式野球、3 位:バスケットボール、女子は、1 位:バスケットボール、2 位:バレーボール、3 位:ダンスである。同県教委スポーツ振興課は、「県内プロスポーツチームと県出身選手の活躍が続き、ここ数年、生徒のスポーツ意欲が高まっている」とみている。

この調査で運動部活動としている対象競技は、本県の教育委員会や本連盟の調査とは異なるので単純には比較できない。しかし、長野県の場合も栃木県と同様、プロスポーツチームや県内出身選手のオリンピックでの活躍が運動部活動の継続に好影響を与えていることは、表 5 の結果からもいえることである。

また、ソフトテニスは異競技に移る生徒が多く、同競技を継続しない生徒が多い。これは、高校からテニスに移行する生徒が多いことが要因の一つと考えられる。山形県高体連ソフトテニス専門部⁸⁾が平成 27 年に行った調査によると、高校でソフトテニスを継続しないと決める時期は、「部活動紹介前」84.2%、「高校入学前」70.2%と早い傾向にあるため、中学と高校の交流を活発にすることが重要であるとしている。対策例として、栃木県大田原市で 10 月から 3 月までに行われている中学 3 年生ソフトテニス合同練習会の取り組みを挙げている。また、高校から始めた生徒の理由の 1 位が「中学校とは違う部活動をしてみたかったから」であることから、未経験者の入部を積極的に行うことで競技人口を増やすことができるのではないかと述べている。

根引⁹⁾によれば、ソフトテニスの非継続要因としては、「硬式テニスになりたい」の他にも、「アルバイトや勉強に専念したい」「スポーツ自体やりたくない」と考える人が存在するとしている。

例えば、中信地区バレーボール専門部では、小・中・高の指導者の交流会を行っている。また、以前は競技団体主催で中学校 3 年生バレーボール教室を行い、高校生との交流試合も行っていった。これらの取り組みと人気マンガの登場により、登録者数は回復傾向にある。

今後、本連盟各専門部においても調査・研究等を行って継続率向上のための対策を講じる必要がある。また、中体連との連携、今まで以上に競技団体やプロスポーツチームなどとの連携を模索していくことが、高校での継続率を上げるために必要なのではないだろうか。

(5) 校種別

表6 校種別にみた継続状況

校種	P<0.01				
	同競技	異競技	非継続	クラブ	合計(n)
A	34.7	25.6	37.8	1.9	262
B	43.6	23.1	32.6	0.7	411
C	46.4	34.9	18.3	0.5	427

C校の生徒の運動部継続率は 81.3%、B校は 66.7%、A校は 60.3%と、C校の生徒が高い。

C校の生徒の同競技継続率は 46.4%であるのに対してA校の生徒は 34.7%、C校の生徒の運動部非継続率が 18.3%であるのに対してA校の生徒は 37.8%となった。

また、C校の生徒の異競技継続率は 34.9%であるのに対して、B校の生徒は 23.1%であった。

つまり、C校の生徒は同競技継続率と異競技継続率が

高いのに対して、A校の生徒のそれが低いという、校種によって継続状況に有意な差があることが示された。(表6)

2. 中学校の運動部活動と高校での部活動継続状況との関係 *クラブチームへの参加者を除く

(1) 入部のきっかけ・入部理由

表7 継続状況別にみた入部のきっかけ (%)

	自分で決定	友達の誘い	先輩の誘い	先生の誘い	保護者の勧め	その他	合計 (n)
同競技	79.3	8.8	4.3	0.6	4.3	2.8	468
異競技	76.5	14.1	3.2	1.0	3.2	1.9	311
非継続	61.4	22.5	7.7	1.9	3.2	3.2	311
合計	73.4	14.2	5.0	1.1	3.7	2.7	1090

P < 0.01

表8 継続状況別にみた入部理由 (%)

	興味・関心	身体を鍛えたい	精神を鍛えたい	友達を作りたい	小学校でやっていた	先生や先輩の勧誘で仕方なく	なんとなく	その他	合計 (n)
同競技	46.4	9.6	2.8	0.6	27.1	0.2	9.0	4.3	468
異競技	49.0	12.3	1.9	1.0	22.6	0.6	10.0	2.6	310
非継続	45.3	10.9	3.5	1.0	13.5	2.6	20.3	2.9	311
合計	46.8	10.7	2.8	0.8	21.9	1.0	12.5	3.4	1089

P < 0.01

表7の入部のきっかけを継続状況別にみると、全体では「自分で決定した」が73.4%と7割以上を占めている。

特に、同競技継続群は「自分で決定」した生徒が79.3%であるのに対して非継続群は61.4%、同競技継続群の「友達の誘い」が8.8%であるのに対して非継続群は22.5%という顕著な差がみられる。池上⁶⁾の研究でも同様の結果が出ている。

表8の入部理由を継続状況別にみると、「興味・関心」が46.8%と多く、次いで「小学校でやっていた」の21.9%が続く。特に、同競技継続群は「小学校でやっていた」が

27.1%であるのに対して非継続群は13.5%、同競技継続群の「なんとなく」が9.0%であるのに対して非継続群は20.3%と顕著な差がみられる。

根引⁹⁾の研究によれば、中学校で始めた影響が「仮入部・クラブ見学・クラブ紹介」「楽しそう・面白そう」の回答者は高校での継続意思が低いとしている。

表7と表8から、高校での運動部活動の継続には、中学での入部時の「より積極的なきっかけと理由」が影響していることを示している。

(2) 1週間の活動日数、活動時間(平日・休日)

表9 継続状況別にみた活動日数(週:%)

	週3日以内	週4～6日	毎日	合計 (n)
同競技	1.9	70.1	28.0	468
異競技	2.3	68.1	29.7	310
非継続	1.6	69.5	28.9	311
合計	1.9	69.3	28.7	1089

週4～6日の活動日数が69.3%と約7割を占めるが、高校での継続状況との間に有意な関係はみられなかった。

また、表10に示すとおり、平日の活動時間は「2～3時間」が54.5%と過半数を超えている。継続状況別にみると、同競技継続群は「2～3時間」が57.5%と多く、ま

た、非継続群は「1～2時間」が38.3%と多いという有意な差がみられる。これは、中学での習慣化した活動が高校での継続に好影響を及ぼしていることを表している。

表10 継続状況別にみた平日活動時間(%)

	1時間以内	1～2時間	2～3時間	3時間以上	合計 (n)
同競技	1.9	28.6	57.5	12.0	468
異競技	1.3	34.8	52.9	11.0	310
非継続	2.9	38.3	51.4	7.4	311
合計	2.0	33.1	54.5	10.4	1089

P < 0.01

表11 継続状況別にみた休日活動時間(%)

	2時 間以 内	2～ 3時 間	3～ 4時 間	4～ 5時 間	5時 間以 上	合計 (n)
同競技	2.6	20.9	42.7	22.6	11.1	468
異競技	4.5	17.4	42.1	25.4	10.6	311
非継続	6.8	14.5	41.2	26.7	10.9	311
合計	4.3	18.1	42.1	24.6	10.9	1090

休日の活動時間は「3～4時間」が42.1%と最も多く、平日よりも時間は長い、高校での継続状況と休日の活動時間との間には有意な関係は得られなかった。

(3) 出場・大会の経験

表12 継続状況別にみた出場の有無(%)

	レギュ ラー	非レギ ュラー	その他	合計 (n)
	P<0.01			
同競技	82.6	13.5	3.9	465
異競技	69.4	24.8	5.8	310
非継続	61.8	31.1	7.1	309
合計	72.9	21.8	5.4	1084

同競技継続群の82.6%が「レギュラー」であったのに対して非継続群は61.8%、異競技継続群も69.4%と、同競技継続群よりも低いという有意な差がみられた。

したがって、レギュラーとしての出場経験が、特に同競技継続率に関連していることが示された。

表13 継続状況別にみた最高レベルの出場大会(%)

	郡市	地区	県	北信 越	全国	合計
	P<0.01					
同競技	8.8	40.2	36.1	10.5	4.5	468
異競技	15.8	42.8	31.8	7.4	2.3	311
非継続	20.5	46.3	23.8	7.5	2.0	307
合計	14.1	42.6	31.4	8.7	3.1	1086

全体では「地区大会」が42.6%最も多く、県大会31.4%、郡市大会14.1%と続いている。

継続状況別では、同競技継続群は、「県大会」が36.1%、かつ、それ以上のレベルの大会への出場も他の群よりも多い。非継続群は、「県大会」が23.8%と少なく、「郡市大会」が20.5%と最も多い。

したがって、上位大会に勝ち進むことによって生まれる試合経験が、継続性に影響しているといえる。

青木¹⁰⁾は、継続・退部に最も強く影響する要因として、男女ともレギュラー状態を挙げている。

また、杉本¹¹⁾は、運動部という集団が、勝利や記録を追求するスポーツ集団であると同時に、学校制度の中では教育的価値を付与された体育集団でもあり、両価性(スポーツ的価値観と教育的価値観)の存在を指摘している。

横田¹²⁾は、この両価性の観点から研究結果を分析し、レギュラー群は、スポーツそのものに価値を見出して運動部を継続するが、非レギュラー群は、意欲が低下し情緒的に消耗しても継続することそれ自体に価値を見出し、教育的価値観にすぎること、退部することを回避しているとしている。また、スポーツ集団の構成員として活動する運動部員と、体育集団の構成員として活動する運動部員の間、何らかの軋轢や確執が生じたとすれば、コミュニケーションの低減の値が、レギュラー群・非レギュラー群ともに有意な増加を示し、著しい悪化を示すこともあるとしている。

さらに、山本¹³⁾は大学生対象の研究から、補欠選手としての集団所属が長引くにつれ、うまくなりたいたか、勝ちたいという向上心を失い、運動部参加の動機は達成志向から健康や体力志向に移行するとしている。

表12、13の結果および先行研究の分析から考えると、試合や大会に出場することは継続率を高める大きな要因といえる。したがって、部活動の運営側で全員が参加して活躍できる機会を設定することも必要であることが示唆される。

(4) 活動の楽しさ

表14 継続状況別にみた中学校部活動の楽しさ(%)

	楽しか った	ふつう	楽しくな かった	合計 (n)
	P<0.01			
同競技	77.1	19.7	3.2	467
異競技	65.0	26.0	9.0	311
非継続	54.5	31.6	13.9	310
合計	67.2	24.9	7.9	1088

全体では「楽しかった」が67.8%と7割近くを占める。継続状況別にみると、同競技継続群の「楽しかった」が77.1%であるのに対して非継続群は54.5%、非継続群の「楽しくなかった」13.9%・「ふつう」31.6%に対して同競技継続群は夫々3.2%、19.7%と有意な差がみられた。

つまり、部活動の楽しかった経験が、継続性に大いに影響していることを示している。

この結果は平成15年に山形県高体連研究部¹⁴⁾が行った調査の結果と一致している。同研究部は、加入率向上のキーワードとなる抽象的な「楽しい」を明らかにするために平成16年にも調査を行っている。これによれば、山形県の部活動の加入率・継続率を向上させる「楽しさ」の要因として次のことを挙げている。

- ①技能の上達を感じることができ適切な活動内容
- ②やる気のある活動の雰囲気
- ③仲間との良好な関係性
- ④精神的な成長を実感できる自主的な活動

さらに男女差にも言及しており、女子はチームへの一体感や友人関係を重視する傾向があり、男子に比べると「褒められることに楽しさ(喜び)を強く感じる」としている。また、男子は「ゲーム中とその結果に楽しさを強く

感じる」傾向があるとしている。

澤口と関岡¹⁵⁾が中学生を対象に行なった研究においても、「楽しさ」を求める生徒が多く、特に女子はその傾向が強いという結果が得られている。

今回の調査では、楽しさについての深まりはないため、今後、継続性に大きな影響を与える楽しさについて研究を深め、各学校においては生徒が楽しさを実感できる部活動運営をしていくことが求められる。

(5) 家族の理解

表15 継続状況別にみた家族の賛否(%)

	P<0.05				合計 (n)
	賛成	意思表 示なし	反対	その 他	
同競技	94.2	4.7	1.1	0.0	467
異競技	92.3	7.1	0.0	0.6	311
非継続	86.5	11.3	1.6	0.6	310
合計	91.5	7.3	0.9	0.4	1088

家族の賛否については、全体では91.5%が「賛成」をしており、「反対」は僅か0.9%であった。継続状況別にみると、同競技継続群の「賛成」が94.2%であるのに対して非継続群は86.5%、同競技継続群の「意思表示なし」が4.7%であるのに対して非継続群は11.3%となり、継続状況によって家族の賛否に有意差がみられた。

笹川スポーツ財団¹⁶⁾が2017年2月に行った「小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調

(7) 満足度

表17 継続状況別にみた中学校部活動全般への満足度(%)

	P<0.01					合計 (n)
	とても満足	満足	どちらで もない	不満	とても不満	
同競技	56.0	32.9	9.6	0.9	0.6	468
異競技	37.1	41.9	15.2	3.9	1.9	310
非継続	35.1	31.5	25.3	5.2	2.9	308
合計	44.7	35.1	15.7	2.9	1.7	1086

全体的には、「とても満足」・「満足」が79.8%と約8割を占めており、満足度は高いようである。しかしながら、同競技継続群は「とても満足」が56.0%と他の群に比べて高く、「どちらでもない」「不満」「とても不満」が極めて少ないのに対して、「異競技継続群」および「非継続群」

査研究」では、次の結果が得られている。

- ①子どものスポーツ活動に対し母親の方が熱心に関わっている。
- ②多くの母親が、スポーツ活動への関与に「やりがい」を感じている。
- ③子どもがスポーツ活動をしない理由の上位は「保護者の負担」であり、子どもがスポーツ活動をしていない家庭の母親は、「送迎や付き添い」「費用の負担」「係や当番の負担」に負担を感じている。

高校においても部活動の継続のためには、家族の理解と協力が不可欠であり、家族が賛成の意思表示をしてくださるような学校や指導者側の対応が大切である。特に上記③の負担の軽減は大きな要因である

(6) ケガや病気の有無

表16 継続状況別にみたケガや病気の有無(%)

	重いケガ 病気	軽いケガ 病気	特に なし	合計 (n)
	同競技	15.0	54.4	30.6
異競技	10.0	55.6	34.4	310
非継続	11.3	51.3	37.4	310
合計	12.5	53.9	33.6	1088

継続状況別にケガや病気の有無については有意な関係性はなかった。

表18 継続状況別にみた指導者への満足度(%)

	P<0.01					合計 (n)
	とても満足	満足	どちらでもない	不満	とても不満	
同競技	41.0	29.3	18.2	6.0	5.6	468
異競技	32.9	28.7	21.6	9.7	7.1	310
非継続	26.3	28.2	21.1	16.6	7.8	308
合計	34.5	28.8	20.0	10.0	6.6	1086

は「とても満足」の割合が低い。また、非継続群においては「どちらでもない」が25.3%となり、継続状況により部活動全般への満足度に有意差がみられた。

中学時代の運動部活動全般への満足度が、高校での継続状況に影響を与えていることが示された。

全体的には、63.3%が「とても満足」「満足」と回答している。

同競技継続群は、41.0%が「とても満足」と回答したのに対して非継続群は26.3%と低い。また、非継続群の16.6%が「不満」と回答したのに対して同競技継続群は6.0%と低く、継続状況により指導者に対する満足度に有意な差がある。異競技継続群の満足度は、同競技継続群と異競技継続群との中間をとるような傾向がみられる。

したがって、中学時代の指導者への満足度が高校での継続状況そして同競技継続状況に影響を与えていることを示している。

青木¹⁰⁾の研究では、継続・退部に最も強く影響する要因のひとつとして指導者への満足度を挙げており、特に男子では、活動内容を厳しいと感じながらも、指導者への満足度が運動部活動継続を促進しているとしている。

このように指導者への期待も高いが、澤口と関岡¹⁵⁾の中学校指導者対象の研究では、自分の経験不足や公務の忙しさを悩みに挙げる先生方が多く、満足に指導の場に足を運ばない(運ばない)状況も明らかになっている。平成26年7月に日本体育協会が実施した「学校運動部活動指導者の実態調査」¹⁷⁾によれば、担当教員が保健体育ではない、かつ、現在担当している部活動の競技経験がない教

員が中学校教員の45.9%が該当しており、そのうち4割が専門的指導力の不足を課題としていることが明らかになっている。また、青柳ら¹⁸⁾は、公立中学校・高等学校部活動顧問672名を対象とした調査から、顧問は年間に平均で1400時間程度を指導・運営に費やし、13万円程度の金額を自己負担していること。また、実際に練習に参加する時間の他、多くの時間をマネジメント業務に費やしていた実態を報告している。ところが、多くの時間を費やしている業務内容が、顧問にとって必ずしも精神的負担が大きいわけではないことも示唆している。

顧問教師の負担を理由としてブラック部活と揶揄され、運動部活動を教育上の「問題」とみなす見方がある一方で、それは必ずしも適切でないとする指摘もある。

中澤¹⁹⁾は、顧問教師にとって運動部活動は教育活動そのものであり、顧問教師が教育を追求するからこそ運動部活動が成立し続けているとしている。

いずれにしても、競技力向上や選手育成の役割を学校・教師が担ってきた競技は多いが、制度疲労を起こしていることは事実である。

今後は、学校で指導すべき教育内容(学校・教師の業務の範囲)を明示しつつ、学校と部活動指導員や地域の役割分担を具体化していくことも課題になるだろう。

表19 継続状況別にみた練習方法の満足度(%)

						P<0.01
	とても満足	満足	どちらでもない	不満	とても不満	合計 (n)
同競技	38.0	35.5	20.5	3.8	2.1	468
異競技	30.0	38.1	23.5	5.8	2.6	310
非継続	24.4	32.8	31.5	8.1	3.2	308
合計	31.9	35.5	24.5	5.6	2.6	1086

全体的には、67.4%が「とても満足」・「満足」と回答している。

同競技継続群は、38.0%が「とても満足」と回答したのに対して非継続群は24.4%と低い。また、非継続群の8.1%が「不満」、31.5%が「どちらでもない」と回答して

いるのに対して、同競技継続群は夫々3.8%、20.5%と低く、継続状況により練習方法に対する満足度に有意な差がある。

したがって、中学校部活動での練習方法の満足度が高校での継続状況に影響を与えていることを示している。

表20 継続状況別にみた大会成績の満足度(%)

						P<0.01
	とても満足	満足	どちらでもない	不満	とても不満	合計 (n)
同競技	20.3	23.3	33.8	17.1	5.6	468
異競技	16.8	23.2	39.4	14.2	6.5	310
非継続	10.4	23.1	38.0	22.4	6.2	308
合計	16.5	23.2	36.6	17.8	6.0	1086

全体的には、「とても満足」・「満足」と回答した生徒は39.7%であり、大会成績に満足している生徒は4割程度である。

同競技継続群は、20.3%が「とても満足」と回答したのに対して非継続群は10.4%と低い。また、非継続群

は、22.4%が「不満」と回答したのに対して、異競技継続群は14.2%と低く、継続状況により中学時代の大会成績の満足度に有意な差がある。

したがって、中学校部活動での大会成績の満足度が高校での継続状況に影響を与えていることを示している。

表21 継続状況別にみた学習と部活動のバランスに関する満足度(%)

	とても満足	満足	どちらでもない	不満	とても不満	合計 (n)
同競技	18.4	33.5	38.5	6.8	2.8	468
異競技	11.9	35.8	41.3	7.1	3.9	310
非継続	13.0	26.3	43.2	12.7	4.9	308
合計	15.0	32.1	40.6	8.6	3.7	1086

P<0.01

全体的には、「とても満足」・「満足」と回答した生徒は47.1%であり5割に満たない。

同競技継続群は、18.4%が「とても満足」と回答したのに対して、非継続群は「満足」が26.3%と低く、加えて、「不満」が12.7%と他の群に比べて高く、継続状況により中学時代の学習と部活動のバランスに関する満足度に有意な差がある。

したがって、中学校での学習と部活動のバランスに関する満足度が高校での継続状況に影響を与えていることを示している。

角谷と無藤²⁰⁾は、部活動継続者にとって、クラスだけ

でなく、部活動においても中学生の欲求が満たされていれば、充実感や学校生活への満足感が高まる可能性があるとしている。特に、クラスでの欲求満足度が低い中学生にとって、部活動は学校生活への満足度を高めてくれる要因になりうると指摘している。

一方、青木¹⁰⁾が高校生を対象に行った研究によれば、退部者の退部理由の上位に「勉強との両立」がある。

このことから、学習・クラス・部活動のバランスを上手にとっていくことは、高校での継続状況に好影響を与えることを示している。

3. 中学時代の運動部活動の効果

表22 継続状況別にみた中学校運動部活動の身体面への効果(%) 複数回答

	特になし	技能が高まった	体力が高まった	身体が丈夫になった	疲れにくくなった	痩せた	太った	食欲が出た	その他	合計 (n)
同競技	1.9	34.1	35.7	16.1	2.5	4.7	0.6	4.4	0.1	894
異競技	3.0	29.1	37.4	16.6	3.4	5.1	0.7	4.6	0.2	591
非継続	7.8	26.2	35.2	12.5	3.7	8.7	1.2	4.1	0.5	562
合計	3.9	30.5	36.1	15.2	3.1	5.9	0.8	4.3	0.2	2047

P<0.01

全体的には、「体力の高まり」(36.1%)と「技能の高まり」(30.5%)を身体面への効果としている回答が多い。

非継続群の回答は、他の群に比べて「技能が高まった」が26.2%、「身体が丈夫になった」が12.5%と低く、「特になし」は7.8%と高い。これに対して、「同競技継続群」の回答は「技能が高まった」が34.1%と高く、「特になし」は1.9%と低いという有意な差がみられた。

澤口と関岡¹⁵⁾の研究では、中学校男子生徒は「体力の

向上」・「技術の向上」を求める生徒が多いことが報告されている。山形県高体連研究部の調査¹⁴⁾では、部活動の加入率・継続率を向上させる「楽しさ」の要因のトップに、「技能の上達を感じることができ適切な活動内容」が挙げられている。

つまり、中学校部活動で「体力の高まり」と「技能の高まり」を得ることで「楽しさ」を感じると、それが高校での継続に好影響を与えていると考えられる。

表23 継続状況別にみた中学校運動部活動の精神面への効果(%) 複数回答

	特になし	根気強くなった	困難に耐えられるようになった	明るい性格になった	その他	合計 (n)
同競技	11.0	39.3	34.5	14.8	0.4	809
異競技	12.8	38.3	34.1	14.1	0.8	525
非継続	19.0	33.3	30.9	16.0	0.8	505
合計	13.7	37.4	33.4	15.0	0.6	1839

P<0.05

全体的には、「根気強くなった」(37.4%)、「困難に耐えられるようになった」(33.4%)を精神面への効果としている回答が多い。

非継続群の回答は、他の群に比べて「根気強くなった」

が33.3%と低く、「特になし」は19.0%と高いのに対して、同競技継続群の回答は「根気強くなった」が39.3%と高く、「特になし」は11.0%と低いという有意な差がみられた。

つまり、中学校部活動での精神面への効果を多く感じている生徒の方が、高校で継続する割合が高いことを示している。

永松ら²¹⁾は、福岡県内の高校生を対象とした15ヶ月間の縦断研究で、青年期における運動部・スポーツクラブ活動の継続的な実施は慢性ストレス反応の低減をもたらし、メンタルヘルスの保持増進に寄与する可能性があることを示唆している。

一方、高田ら²²⁾は、中学・高校での部活動体験が青年期の不適応を起こしている臨床事例を報告している。多くの事例が、自己の未成熟と人間関係が綾をなして不適応を起こしているため、個人の精神的発達面からの検討の必要性を示すとともに、不適応を引き起こしている背景(専制的集団雰囲気、勝利至上主義、非科学的精神主義)

を社会心理学的観点からも検討していく必要性を示唆している。

指導する側としては、部活動の精神面への良い影響と悪い影響の両面を認識した上で、精神面へのアプローチをしていくことが継続率の向上のために必要であろう。

松井²³⁾は、「褒める」や「励ます」といった支持的なフィードバックが、生徒の内発的動機づけに肯定的に作用するだけでなく、「注意」や「叱責」といった懲罰的なフィードバックであっても、生徒と指導者の親和的信頼関係が築けている場合には効果的に作用するとしている。

つまり、指導者の言動それ自体ではなく、生徒と指導者の関係によって、生徒の受け止め方や反応が決まってくるのである。この研究結果も、生徒の精神面へのアプローチを図る際に参考になるであろう。

表24 継続状況別にみた中学校運動部活動の学習面への効果(%) 複数回答

	特になし	集中力が ついた	学習能率が 上がった	勉強するよ うになった	成績が上 がった	その他	合計 (n)
同競技	37.6	36.6	11.3	10.0	2.1	2.4	670
異競技	40.0	35.4	11.5	6.1	3.4	3.6	443
非継続	47.7	29.7	9.3	9.3	1.4	2.6	428
合計	41.1	34.3	10.8	8.7	2.3	2.8	1541

全体的には、「特になし」が41.1%と最も回答が多い。また、「集中力がついた」が34.3%と精神面への効果としている回答が多い。

中学校部活動での学習面への効果と高校での継続状況との間に有意な関係は認められないが、「特になし」の回答は非継続群が47.7%と高いのに対して同競技継続群は

37.6%と低いこと、「集中力がついた」の回答が非継続群は29.7%と低いことが特徴である。

文武両道というのは難しいことではあるが、学習面への効果が「特になし」ではなく、具体的な現象として得られるような指導ができれば、継続率や加入率も上昇するのではないだろうか。

表25 継続状況別にみた中学校運動部活動の行動面への効果(%) 複数回答

	特になし	規則的 な生活 になっ た	協力的 になっ た	友達が 増えた	よく話 すよう になっ た	礼儀正 しくな った	積極的 になっ た	責任感 が出て きた	行動が 活発に なった	その他	合計 (n)	P<0.05
同競技	4.9	10.7	10.0	14.1	5.6	22.8	10.3	12.6	8.4	0.5	856	
異競技	8.0	9.1	10.7	18.8	4.3	20.2	7.7	13.0	7.9	0.4	560	
非継続	9.8	10.1	8.7	17.1	3.7	19.3	9.6	12.9	8.8	0.0	543	
合計	7.1	10.1	9.9	16.3	4.7	21.1	9.3	12.8	8.4	0.3	1959	

全体的には、「礼儀正しくなった」(21.1%)、「友達が増えた」(16.3%)を行動面への効果としている回答が多い。また、非継続群の「特になし」が9.8%と高いのに対して、同競技継続群が4.9%と低いのが特徴である。

上野²⁴⁾は、高校における運動部活動経験はライフスキル(対人スキル、個人的スキル、進路成熟)の獲得を推進することにより積極的な影響を及ぼすとしている。また、

中澤²⁵⁾は、運動部活動は「挨拶をする」、「時間を守る」などのような規範的な行動様式を習得できる場として認識されていると述べている。

部活動指導の結果として行動面への効果を生徒が感じられるように指導者がアプローチをすることは、継続率や加入率の上昇のための要因になるものと考えられる。

4. 中学時代の運動部活動の悩み

表26 継続状況別にみた中学運動部活動における悩み(%) 複数回答

順位	悩みの内容	P<0.01			
		同競技	異競技	非継続	合計
1	疲れがたまった	18.8	19.1	18.0	18.7
2	休日が少なかった	14.1	15.2	15.2	14.7
3	勉強や遊びの時間が少なかった	15.8	11.1	9.9	12.7
4	部員との人間関係で悩んだ	8.1	12.0	11.1	10.1
5	特になし	9.5	6.9	6.0	7.7
6	あまり勉強しなくなった	8.0	6.2	6.2	6.9
7	成績が下がった	3.8	3.2	5.3	4.1
8	活動場所が狭かった	3.5	3.7	4.0	3.7
9	指導者との人間関係で悩んだ	3.3	3.0	4.6	3.6
10	うまくならなかった	2.5	4.1	4.0	3.4
11	指導者の指導力が低かった	2.3	3.8	3.2	3.0
12	練習時間が長すぎた	2.8	2.3	3.3	2.8
13	授業に集中できなくなった	2.0	2.7	3.0	2.5
14	指導者が張り切り過ぎた	1.2	2.9	2.5	2.1
15	練習時間が短すぎた	2.0	2.1	1.5	1.9
16	指導者があまり指導してくれなかった	1.8	1.6	1.5	1.6
17	その他	0.6	0.0	0.8	0.5
合計 (n)		1079	728	756	2563

全体的には、「疲れがたまった」・「休日が少なかった」あるいは「勉強や遊びの時間が少なかった」という疲労や生活時間的側面の悩みが多い。

しかし、前出の表9から11では、高校での継続状況に1週間の活動日数や平日・休日の活動時間はあまり影響していないという結果が出ており、悩みの内容とは矛盾しているようにも思われる。

ただし、表26からは、同競技継続群の「勉強や遊びの時間が少なかった」が15.8%と競技継続状況別では最も高い割合を示しており、同競技継続群であっても勉強や遊びとのバランスに悩んでいる側面もみえてくる。

いずれにしろ、悩みを抱えながら部活動を行っている

生徒が多いことは明らかで、最も大切なのは高校で運動部活動を継続しない生徒をいかに減らすか、あるいは中学校の運動部活動に加入する生徒をいかに増やすかである。

したがって、生徒の実情に応じて適切な活動日数、休養日、活動時間を設定していくことは、より良い活動のために大切なことである。

また、「部員との人間関係で悩んだ」が12.0%、11.1%と、異競技継続群と非継続群の割合が高い。この経験が、異競技への変更もしくは継続しない原因のひとつになっているのではないかと考えられる。

5. 高校での運動部活動

(1) 中学と同じ競技の運動部活動を継続している理由

表27 中学と同じ競技の運動部活動を継続している理由 (%) ※複数回答

P<0.05

順位	同競技継続理由	男子	女子	合計 (%)
1	中学校で続けてきた	36.1	35.7	35.9
2	大好きな種目	14.0	16.1	14.8
3	体を鍛えたい	6.4	6.8	6.5
4	楽しそうな雰囲気	5.5	7.2	6.2
5	部活動が盛んな学校	5.3	4.2	4.9
6	強い部活動	5.6	3.5	4.8
7	仲の良い先輩や仲間がいる	3.6	6.3	4.7
8	指導力のある指導者がいる	3.9	2.8	3.5
9	精神を鍛えたい	2.2	2.8	2.4
10	周囲の人に勧められた	1.7	3.0	2.2
11	痩せたい	1.2	3.0	2.0
12	他にやりたい部活動がない	1.7	2.3	2.0
13	なんとなく	2.3	1.4	2.0
14	その他	2.2	1.2	1.8
15	練習が厳しい	1.6	0.5	1.1
16	施設設備が充実している	1.1	0.7	0.9
17	部活動があまり盛んでない学校	1.2	0.2	0.8
18	上下関係がない	1.2	0.2	0.8
19	練習が楽	0.6	0.7	0.7
20	背が高い	0.3	0.9	0.6
21	上下関係がある	0.6	0.2	0.5
22	あまりお金がかからない	0.5	0.2	0.4
23	弱い部活動	0.5	0.0	0.3
24	背が低い	0.3	0.0	0.2
25	太りたい	0.3	0.0	0.2
	合計 (n)	642	429	1071

中学と同じ競技の運動部活動を継続する理由では、男女とも1位が「中学校で続けてきた」、2位が「大好きな種目」であった。中学校までの経験で大好きになった競技を継続しようとする、積極的あるいは競技に対しての好意的な態度が伺える。

特徴的なのは、「仲の良い先輩がいる」「痩せたい」と回答した女子が男子に比べて多いことである (P<0.05)。女子の部活動の目的は、人との関わり合いが大きなウエイトを占めているという研究結果¹⁵⁾もあり、それを裏付ける結果となった。

(2) 中学と異なる競技の運動部活動を継続している理由

表28 中学と異なる競技の運動部活動を継続している理由 (%) ※複数回答

順位	異競技継続理由	男子	女子	合計 (%)
1	新しいことにチャレンジしたい	19.9	23.9	21.6
2	中学までにやり尽くした	10.7	18.2	14.0
3	楽しそうな雰囲気	13.2	14.6	13.8
4	中学まででその競技が嫌いになった	7.2	8.0	7.5
5	やりたい競技の部活動が中学校になかった	8.0	5.1	6.7
6	大好きな競技だから	4.7	4.8	4.7
7	体を鍛えたい	6.5	2.5	4.7
8	精神面を鍛えたい	4.5	2.5	3.6
9	他にやりたい部活動がないから	3.0	4.5	3.6
10	中学までの競技に適性がない	3.0	3.2	3.1
11	なんとなく	4.0	1.0	2.7
12	仲の良い先輩や仲間がいる	2.7	1.6	2.2
13	周囲の人のすすめ	1.7	2.5	2.1
14	練習が厳しい	1.5	1.0	1.3
15	痩せたいから	1.0	1.3	1.1
16	指導力のある指導者がいる	1.2	0.6	1.0
17	背が高いから	1.5	0.3	1.0
18	練習が楽	1.0	0.6	0.8
19	休みが多い	1.0	0.6	0.8
20	上下関係がある	1.0	0.6	0.8
21	中学の競技で指導者に叱られすぎた	0.7	1.0	0.8
22	上下関係がない	0.7	0.6	0.7
23	背が低いから	1.0	0.3	0.7
24	その他	0.0	0.6	0.3
25	あまりお金がかからない	0.2	0.0	0.1
	合計 (n)	402	314	716

中学と異なる競技の運動部活動を継続する理由では、男女とも1位が「新しいことにチャレンジしたい」であった。特定の運動部活動にとっては残念なことであるが、運動部全体からみれば、生徒が自分の興味・関心や適性を考えた上での積極的な理由であり、歓迎すべきであろう。

1つのことに取り組む中で、達成感や自己実現を経験していくことは部活動の意義のひとつである。神谷²⁶⁾は、学校教育の運動部活動において重要なことは、卒業後にスポーツを続けられる力をつけ、スポーツを通して社会と関わられるようにすることであると述べている。そして、それが身につくのであれば、各教師が指導できる種目に限定してもよいし、あるいはシーズン毎に種目を変えることなどが認められても良いはずであるとも述べている。

昨年10月、スポーツ庁から発表された通称「鈴木プラン」²⁷⁾では、大会終了を機に引退する選手、ベンチや応援に回った選手などを対象にトライアルを行うなどして、ポテンシャルのあるアスリートを発掘する事業の推進を発表している。

著者は、「夏は野球・冬はスケートで活躍する中学生」、

「高校時にクロスカントリースキー専門の選手が、大学で箱根駅伝のエースとして活躍すること」など、競技として複数種目を経験した選手の活躍をみてきた。また、県内の高校には、「走高跳とフィギュアスケート」、「バスケットとアイスホッケー」を実践して上位大会で活躍している生徒もいる。さらに、平昌五輪フィギュアスケート日本代表の坂本花織選手は、中学まで水泳とフィギュアスケートの両方に取り組んできた経歴を持つ。

少子化の影響であらゆる部活動で部員数が減少している今、日本では様々な理由から難しいことはあるが、アメリカの学生スポーツのシーズン制を参考にして、「少ない生徒を取り合うのではなく、多くのスポーツを経験させてあげられるシステム」を検討し、できるところから始めていく時に来ているとも思う。例えば、「夏は自転車・冬はスケート」、「夏は陸上長距離・冬はクロスカントリースキー」など、生徒の希望や適性に応じ、兼部や複数の競技実践を認めるところから始めてはどうだろうか。

また、表28の結果で最も心配されるのは、「中学までにやり尽くした」と回答した女子が18.2%と多いことであ

る。著者も、女子生徒から、「もう十分」・「やり尽くした」という話を何度も聞いてきた。そして、この思いを持ちながらも継続してきた競技から離れられず、別の形でその

競技の運動部を継続する女子生徒を数多くみてきた。

何が原因でバーンアウトを起こすのか、検証する必要はあるだろう。

(3) 高校で運動部活動を継続しない理由

表29 高校で運動部活動を継続しない理由(%) * 複数回答

順位	理由	男子	女子	合計 (%)
1	他にやりたいことがある	8.7	13.4	11.2
2	自由な時間が欲しい	9.4	10.5	10.0
3	中学までにやり尽くした	10.4	9.3	9.8
4	休日が少ない	6.7	7.3	8.6
5	勉強に力を入れたい	9.1	9.6	8.3
6	帰宅が遅くなる	6.0	7.0	7.9
7	やりたい部活動が高校にない	2.7	4.7	5.3
8	体力がついていかない	5.0	7.6	5.3
9	中学までにスポーツが嫌いになった	5.0	4.1	4.5
10	スポーツに適性がない	4.7	3.8	4.4
11	その他	4.7	3.5	4.0
12	練習が厳しい	5.0	2.3	3.6
13	楽しくなさそうな雰囲気	4.4	2.6	3.4
14	ケガや病気がある	2.3	3.5	3.0
15	仲の良い先輩や仲間がいない	3.7	2.0	2.8
16	お金がかかる	2.7	2.6	2.6
17	通学に時間がかかる	2.0	2.6	2.3
18	保護者の反対	1.0	1.7	1.4
19	上下関係がある	0.7	1.5	1.1
20	社会体育やスポーツクラブに参加している	0.3	0.6	0.5
	合計 (n)	298	344	642

高校で運動部活動を継続しない理由の上位には、「自由な時間が欲しい」・「休日が少ない」・「帰宅が遅くなる」という生活時間的側面を示す理由、および「他にやりたいことがある」・「勉強に力を入れたい」という興味・関心の側面を示す理由が上位にある。これは、生徒の欲求と部活動の実態が合っていないことを示している。

特に、生活時間的側面については部活動運営側で改善することは可能であると考えられる。

(4) 運動部活動で満足度を高めるために必要なこと

継続・非継続にかかわらず、調査対象の生徒から得た「運動部活動で満足度を高めるために必要なこと」を「とても必要」の割合が高い順から表 30 に示した。

特に、「部活動が楽しい活動である」については約 8 割が「とても必要」と回答している。表 14 に示した「中学校の部活動が楽しかったと回答した生徒の方が運動部活動、さらに同競技の運動部活動を継続する割合が高い」ことから、満足度を高めるためにはもっとも重要な事柄であると考えられる。前述したとおり、「楽しい活動とは何か」を追究する必要がある。

さらに、男女間で統計的に有意な差がみられた事柄に

特徴的なのは、女子の「他にやりたいことがある」が 13.4%であり、男子の 8.7%をかなり上回っていることである。

この理由は、青木¹⁰⁾の研究での退部理由および根引⁹⁾の研究での非継続理由でも上位にあり、高校入学時に、女子の方が興味・関心の方向を移す傾向が高いことが伺える。

ついて分析したところ、次に示す特徴がみられた。

1位～18位で有意差のあった 10 項目において、女子は「とても必要」・「必要」と回答する生徒が多いのに対して、男子は、「あまり必要ない」・「全く必要ない」・「わからない」と回答する生徒が多いことである。これとは逆に、19位の「学校に強豪の部活動がある」と 20位の「練習時間が短い」だけは、男子が「とても必要」・「必要」と回答した生徒が多かった。

換言すれば、女子の方が男子よりも部活動のことを「繊細に」そして「詳細に」考えているということが明らかになった。

表30 満足度を高めるために必要なこと (%)

順位	満足度を高めるために必要なこと	とても必要	必要	** : P<0.01		* : P<0.05	
				あまり必要ない	全く必要ない	わからない	男女差
1	部活動が楽しい活動である	78.3	17.0	3.2	0.4	1.1	
2	指導者に知識や指導力がある	69.9	24.8	3.8	0.5	0.9	
3	安全管理・事故防止の配慮がある	68.7	25.5	3.9	0.5	1.3	*
4	活動場所や施設が整っている	64.0	29.5	4.7	0.5	1.3	
5	部員が自主的・主体的に活動している	61.3	33.3	3.6	0.5	1.3	*
6	活動目標がはっきりしている	61.0	30.3	6.8	0.5	1.3	
7	指導者が社会性や人間性の育成を大切にしている	60.3	32.8	4.2	0.6	2.1	**
8	休養が十分とれる	57.3	34.2	5.8	1.0	1.7	
9	部員の個性が尊重されている	57.1	35.3	5.5	0.5	1.6	
10	計画的な活動をしている	56.1	34.7	6.7	0.8	1.7	**
11	練習時間が十分とれる	55.8	33.0	8.1	1.2	1.9	**
12	技能の差に応じて部員全員が活躍できる場がある	55.7	32.9	7.3	1.1	3.0	*
13	勉強との両立ができる	53.7	35.1	6.9	1.6	2.8	**
14	大会などで部の成績を高める	50.1	34.6	9.9	1.4	3.9	**
15	保護者の支援や協力がある	48.6	36.2	10.8	1.4	3.0	**
16	指導者が部活動に出席する	48.0	39.7	8.5	1.8	2.0	**
17	学校にたくさんの部活動がある	44.4	34.3	13.2	1.0	7.2	
18	外部指導者の協力がある	36.6	32.5	21.4	3.4	6.2	
19	学校に強豪の部活動がある	32.3	29.4	24.6	3.1	10.6	**
20	練習時間が短い	16.3	19.1	40.2	12.7	11.8	**

6. 女子の継続率の低さに関わる要因

女子の継続率の低さについては表3に示した。また、本連盟が実施している運動部活動調査の自由記述式の回答にも、この記載が多くみられる。ここでは、性別の観点か

ら分析した中から、統計的に男女の有意差が認められ、女子の継続率の低さに関連すると考えられる要因について考察をする。

(1) 非継続の理由

表29に示したとおり、高校で運動部活動を継続しない理由には、統計的に有意な男女差はみられなかった。

ただし、男女ともに上位の理由の特徴は、「他にやりたいことがある」・「自由な時間がほしい」・「休日が少ない」・「勉強に力を入れたい」・「帰宅が遅くなる」というように、生活時間的な側面や生徒の興味・関心が、部活動の実態と合っていないことに集約されるということである。特に、「他にやりたいことがある」と回答した女子が13.4%と、男子の8.7%と比べて多いことは、女子の継続率の低さに

影響を及ぼしているといえるであろう。

池上⁶⁾の研究においても、「自由な時間がほしい」・「他にやりたいことがある」・「勉強に力を入れたいから」、あるいは「帰りが遅くなるから」という理由が、非継続理由の上位にある。

運動部の実態が生徒の時間的側面と合致しないことやスポーツ以外に興味・関心の対象を移していることが女子の継続率の低さに影響を与えているといえる。

(2) 悩み

表31 男女別にみた中学校運動部活動で経験した悩み(%) * 複数回答

P<0.01

順位	悩みの内容	男子	女子	合計 (%)
1	疲れがたまった	19.9	17.5	18.8
2	休日が少なかった	15.3	14.2	14.8
3	勉強遊びの時間が少ない	12.7	12.8	12.7
4	部員との人間関係で悩んだ	5.4	14.9	9.8
5	特になし	11.1	4.2	7.9
6	あまり勉強しなくなった	7.1	6.4	6.8
7	成績が下がった	3.4	4.8	4.0
8	活動場所が狭かった	3.6	3.7	3.6
9	指導者との人間関係で悩んだ	3.1	4.1	3.6
10	うまくならなかった	3.1	3.7	3.4
11	指導力が低かった	3.0	2.8	2.9
12	練習時間が長すぎた	2.8	2.8	2.8
13	授業に集中できなくなった	2.9	2.4	2.7
14	指導者張り切りすぎ	2.3	1.8	2.1
15	練習時間が少なすぎた	2.3	1.4	1.9
16	あまり指導してくれなかった	1.5	1.9	1.7
17	その他	0.3	0.6	0.5
合計 (n)		1414	1232	2646

中学校運動部活動で経験した悩みの上位は、「疲れがたまった」・「休日が少なかった」・「勉強遊びの時間が少ない」という休養や時間的側面に関することである。

また、もっとも特徴的なのは、女子の「部員との人間関係で悩んだ」が 14.9% (女子2位) と多いのに対して男子は 5.4% (男子6位) と少なく、男子の「特になし」が 11.1% (男子4位) と多いのに対して女子は 4.2% (女子7位) と少ないという有意な男女差がみられることである。

したがって、女子は男子に比べて悩みを抱えており、特に、部員との人間関係で悩んでいる生徒が多いということが明らかになった。

澤口と関岡¹⁵⁾は、女子生徒の部活動の悩みは「人間関係」が多く、人との関わり合いが非常に大きなウエイトを占めていると報告している。

さらに、山口²⁸⁾の研究においても、女子が悩み、退部を検討する要因として、人間関係が大きく影響しており、それは、特定の時期ではなくいつでも起きていることから、人間関係の変化に注意を払う必要があると指摘している。そのための一方法として、女性指導者の立場から、部活動の女子生徒に「平等に声がけをすること」が大切であると本年度の研究大会の分科会で著者の質問に対してご示唆をくださった。

また、前述のとおり、女子の方が男子よりも部活動のことを「繊細に」そして「詳細に」考えている。

女子に、「人間関係」で再び悩みたくないと考えている生徒が多いことが、継続率の低さにつながっていると考えられる。

(3) 土日の活動時間と週の活動日数

表32 男女別にみた中学部活動の休日活動時間(%)

P<0.05

	2時 間以 内	2～ 3時 間	3～ 4時 間	4～ 5時 間	5時 間以 上	合計 (n)
男子	5.5	19.5	38.8	24.5	11.7	616
女子	2.5	17.0	45.2	24.5	10.8	511
合計	4.2	18.4	41.7	24.5	11.3	1127

表33 男女別にみた中学校部活動の活動日数(週:%)

P<0.05

	週3日 以内	週4～ 6日	毎日	合計 (n)
男子	2.3	70.9	26.8	616
女子	1.6	64.7	33.7	510
合計	2.0	68.1	29.9	1126

表 32 に示すとおり、女子は休日に 3～4 時間活動するのが 45.2% と多いのに対して男子は 38.8% と少ないという有意な男女差がみられた。

つまり、休日は女子の方が長い時間活動しているということである。

また、表 33 に示すとおり、女子は毎日活動するのが 33.7% と多いのに対して男子は 26.8% と少なく、男子は週 4～6 日の活動が 70.9% と多いのに対して、女子は 64.7% と少ないという有意な男女差がみられた。

つまり、女子の方が活動日数も多いということである。この 2 つの結果が示すとおり、女子の方が男子に比べ

て休日の活動時間と活動日数が長いことが、表 29 の非継続理由および表 31 の悩みに繋がっていると考えられる。

筆者は、経験的に「女子の部活動の方が練習時間は長い傾向にあること」を肌で感じてきている。指導者からは、「女子の方が上達するのに時間がかかる」といった意見も聞いたことがある。また、運動部活動を継続しない女子生徒からは、前述のとおり「もう十分」・「やり尽くした」という意見も聞いてきた。

これら女子生徒の継続率に影響を及ぼすと考えられる原因を部活動運営側が改善しなければ、継続率の回復や向上は望めないのではないだろうか。

IV. まとめ

中学校から高校への運動部活動の継続に焦点を当て、中学校で運動部活動に加入していた高校 1 年生を対象に、中学校での運動部活動の実態および高校での運動部活動の継続状況等を調査・分析した結果、次のようなことが明らかになった。

(1) 調査対象生徒の高校での運動部活動継続状況

運動部活動継続率は 70.8% (男子: 75.0%、女子 65.7%) であった。

(2) 男子は同競技継続者が多く、女子は非継続者が多いという有意な性差がみられた。

(3) 中学校での集団的スポーツ実施群は、個人的スポーツ実施群に比べて、同競技を継続する割合が高く、非継続者が少ないという有意な差がみられた。

(4) 中学でのサッカー経験者は同競技継続率が最も高く、ソフトテニス経験者は異競技に移る生徒が多かった。(標本数 50 以上)

(5) いわゆる C 校の生徒は、高校での運動部継続率が高い。

(6) 高校での運動部継続状況に影響を与える中学校部活動の要因

① 大きな影響を与える要因

- ・入部のきっかけ
- ・入部理由
- ・平日の活動時間
- ・大会への出場の有無
- ・出場た大会のレベル
- ・楽しさ
- ・大会成績の満足度
- ・学習と部活動の両立に関する満足度

・身体面に「体力の高まり」「技能の高まり」の効果を感じること。

・「部員との人間関係で悩んだ」経験があること。

② 影響を与える要因

・家族の賛否

・精神面に「根気強くなった」「困難に耐えられるようになった」の効果を感じること。

・行動面に「礼儀正しくなった」「友達が増えた」の効果を感じること。

(7) 高校での運動部活動

① 同競技の運動部活動を継続している理由

男女とも 1 位が「中学校で続けてきた」、2 位が「大好きな種目」であること。

② 異競技の運動部活動を継続している理由

男女とも 1 位が「新しいことにチャレンジしたい」であること。最も心配されるのは、「中学までにやり尽くした」と回答した女子が多いこと。

③ 運動部活動を継続しない理由

「自由な時間が欲しい」・「休日が少ない」・「帰宅が遅くなる」という生活時間的側面を示す理由、および「他にやりたいことがある」・「勉強に力を入れたい」という興味・関心の側面を示す理由が上位にあること。

④ 運動部活動で満足度を高めるために必要なこと

約 8 割の生徒が、「部活動が楽しい活動である」について「とても必要」と回答していること。

(8) 女子の継続率の低さに関わる要因

① 高校入学時に、他への興味・関心を示す女子が多いこと。

② 男子に比べて、中学校部活動で「部員との人間関係で悩んだ」経験を持つ生徒が多いこと。

③ 男子に比べて、中学校部活動での「休日活動時間」と「1 週間の活動日数」が多いこと。

V. おわりに

冒頭に、「部活動が変わらざるを得ない、変わらなければならない時代に突入しているといっても過言ではない」と記した。

平成 29 年度の第 52 回全国高体連研究大会のシンポジウムで、部活動研究の第一人者である早稲田大学スポーツ科学学術院の中澤篤史准教授は、部活動のこれからを考える論点として、「国際的にみて特異的に大規模化し、歴史的に見て過剰なほど肥大化した日本の部活動は、その持続可能性が問われている」と指摘している。未来の部活動の持続可能な発展のために考えなければならない時にきているのである。

母集団が大きいほど優秀な才能も現れやすいことほどの世界でも共通することであるが、急速に進行する「少子化」と叫ばれて久しい「二極化」により、それは次第に小さくなる方向に進んでいる。したがって、スポーツに係る者が標本を大きくする対策を講じるべきである。

屋外で遊ぶことが少ない現代の子どもたちをスポーツに親しませるためには、小さい頃、特に、小学生年代からのアプローチが不可欠である。これについては小学校、行政、競技団体などの仕掛けに期待するところである。

ここでは、中学・高校年代の部活動の活性化や競技力の向上を目指すには、やはり運動部加入数や継続率を高める必要があるという視点に立ち、本調査や先行研究の文献考証から次のような提言をする。学校や生徒の実態に応じて取り組んでいただければ幸いである。

1. 部活動運営の改善

- ・ 中学時の運動部活動の悩みおよび高校で運動部活動を継続しない理由の上位は、「生活時間的側面」と「休養」に係ることである。
- ・ 試合や大会に出場することは継続率を高める大きな要因である。
- ・ 運動部活動で満足度を高めるためには「楽しい活動」である」ことが大きな要因である。
- ・ 女子は、男子に比べて中学校部活動で「部員との人間関係で悩んだ」経験を持つ生徒が多く、部活動に対して繊細に詳細に考えている、また、バーンアウトする生徒も多い。

これらの知見から、具体的な改善点は次のとおりである。

- (1) 生徒の実態に応じた活動日数、休養日、活動時間の設定
- (2) 多くの生徒が活躍できる機会の設定
- (3) 生徒が「楽しさ」を感じることができる運営と「楽しさ」の研究
- (4) 女子の人間関係の悩みやバーンアウトに対する十分なケア

1. 県教委や市町村教委の指導のもと、複数校合同部活動や学校間連携方式での部活動実践を進める ～今ある環境や人的資源の有効活用～

学校の小規模化、部活動の設置数が減少していること、専門的な指導のできる教員がいないなどの理由から、生徒が希望する運動部活動に入部できない状況が生じている。今回の調査においても「やりたい部活動がない」ことを理由に運動部活動を継続していない生徒がいることも明らかになった。

文部科学省は、スポーツ振興計画(2000)²⁹⁾およびスポーツ基本計画(2012)³⁰⁾で運動部活動の運営改善の具体的方策として複数校合同部活動等の推進を促している。

既に、長野県内では岡谷市内中学合同スケート部などで実践されているが、北海道教育委員会³¹⁾や札幌市教育委員会³²⁾では、以前から複数校合同部活動や学校間連携方式という形で事業を進めている。

また、田代³³⁾は、「みんなで育てる」という理念で行っている静岡県東部地区の陸上競技合同練習会や学校内の他の部活動との合同練習(韮山高校、熱海高校、小山高校)の事例から、実施方法の工夫により、今ある環境や人的資源でも部活動の活性化や良い活動ができるとしている。

ただし、個人的スポーツは比較的導入しやすいが、集团的スポーツは難しい場合も多い。それは、高体連や中体連の大会開催基準要項や参加基準が制限していることも理由のひとつである。少子化で学校統廃合が進む中、高体連や中体連でも、これらの規程を見直すことも将来的な課題になるであろう。

1. 生徒の希望により、特にシーズン制のある競技については、兼部や複数種目の競技実践を認める

生徒の興味・関心は多様化している。また、生徒にとって本当に適性のある競技は、中学・高校時代に判断できない場合もある。

スポーツ振興計画およびスポーツ基本計画では複数種目の実施など柔軟な運営が促されており、少子化の中、「少ない生徒を取り合わない」という運営・指導者側の認識も必要である。

1. きちんと整備された部活動指導者制度の導入

学校部活動は、世界に例をみない日本型のスポーツ教育システムである。しかし、これを教員のみで支えていくことは困難な状況である。

外部指導者の導入についても、スポーツ振興基本計画およびスポーツ基本計画で促されているところである。

さらに、平成 29 年 4 月 1 日から「学校教育法施行規則の一部を改正する省令」が施行され、部活動指導員の名称および職務を明らかにし、部活動の指導体制の充実を図るため、学校の設置者が部活動指導員に係る規則等を整備することになっている。しかしながら、部活動指導員の

身分、補償、勤務日数、勤務時間、報酬、資格、職務の具体的内容、研修などを考える必要がある。加えて、高校の場合は県の単独予算となることもあり、早急な導入は難しいと考えられる。したがって、時間をかけて検討し、学校で指導すべき教育内容、学校と部活動指導員や地域の役割分担がきちんと整備された制度の

導入が望まれる。

VI. 謝 辞

本調査・考察を進めるにあたり、データ収集にご協力くださった長野県下高等学校の先生方・生徒諸君に対し、ここに感謝の意を表します。

【引用文献】

- 1) 平成 29 年度 (2017 年度) 学校基本調査 (速報) 長野県分第 5 表 長野県企画振興部情報政策課統計室統計情報ホームページ
- 2) 平成 28 年度高等学校運動部活動調査 長野県教育委員会
- 3) 長野県中学生期のスポーツ活動指針 (資料編) 長野県教育委員会 平成 26 年 2 月
- 4) 森田 啓之 運動部活動における「競技力向上」の問題性—「対外運動競技基準」の緩和をめぐる体育・スポーツ哲学研究 15-1 3-16 (1993)
- 5) (公財) 全国高体連加盟・登録状況 平成 29 年度 8 月
- 6) 池上 寿伸 運動部活動における継続性に関する研究 佐賀大学教育学部研究論文集 Vol.9 No.2 223-236 (2005)
- 7) 平成 28 年度栃木県中学校・高等学校運動部に関する調査結果について 栃木県教育委員会スポーツ推進課 (2017)
- 8) 山形県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部 競技人口増加のための高校生意識調査に関する研究 (2015)
- 9) 根引 唯 中高生における高校でのソフトテニス継続・非継続要因に関する研究 早稲田大学スポーツ科学部 (2010)
- 10) 青木邦夫 高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因 体育学研究 第 34 巻 第 1 号 89-100 (1989)
- 11) 杉本厚夫 中学・高校運動部員における社会的アンビバランスの変容 体育学研究 31: 197-212 (1985)
- 12) 横田 匡俊 運動部活動の継続および中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動 体育学研究 47: 427-437 (2002)
- 13) 山本 教人 大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較 体育学研究 35: 109-119 (1990)
- 14) 山形県高等学校体育連盟研究部 部活動の楽しさと部活動加入率の関わり 一部活動の楽しさとは何か — (2004)
- 15) 澤口裕太・関岡康雄 運動部活動における活動意識に関する研究—中学校運動部活動参加者を対象として— 仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集 Vol. 4 (2003)
- 16) 笹川スポーツ財団 小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究 (速報値) (2017)
- 17) 学校運動部活動指導者の実態調査 日本体育協会 (2014)
- 18) 青柳 健隆ら 運動部活動顧問の時間的・精神的・経済的負担の定量化 スポーツ産業学研究 Vol.127, No.3 299-309 (2017)
- 19) 中澤 篤史 なぜ教師は運動部活動へ積極的にかかわり続けるのか: 指導上の困難に対する意味づけ方に関する社会学的研究 体育学研究 56:373-390 (2011)
- 20) 角谷詩織・無藤 隆 部活動継続者にとっての中学校部活動の意義 充実感・学校生活への満足度とのかかわりにおいて 心理学研究 Vol.172 No.2 79-86 (2001)
- 21) 永松 俊哉ら 青年期における運動部・スポーツクラブ活動がストレスおよびメンタルヘルスに及ぼす影響—高校生を対象とした 15 か月間の縦断研究— 体力研究 No.108 1-7 (2010)
- 22) 高田知恵子ら 部活動体験による青年期不適応について 事例検討 日本教育・心理学会総会発表論文集第 29 回総会発表論文集
- 23) 松井幸太 高校運動部活動における生徒の内発的動機づけ—指導者のフィードバック行動および生徒と指導者の関係に対する生徒の認知からの検討— スポーツ心理学研究 Vol.41 No.1 51-63 (2014)

- 24) 上野耕平 ライフスキルの獲得を導く運動部活動
経験が高校生の進路成熟に及ぼす影響 スポーツ教
育学研究 Vol.34 No.1 p13-22 (2014)
- 25) 中澤 篤史 生徒理解・生徒指導の観点からみた
運動部活動と学校教育の結び付き トレーニングジ
ャーナル 27(5) P46-50
- 26) 神谷 拓：運動部活動の制度史と今後の展望 体
育科教育学研究 30 (1) 75-80 (2014)
- 27) 競技力強化のための今後の支援方針(鈴木プラン)
スポーツ庁ホームページ
- 28) 山口 陽子 部活動における心の健康と安全ーこ
ころの支援に向けた実態調査からー 平成 29 年度
全国高等学校体育連盟研究大会紀要 93-99
- 29) スポーツ振興基本計画 文部科学省ホームページ
- 30) スポーツ基本計画 文部科学省ホームページ
- 31) 運動部活動の充実～複数校合同部活動の実践事例
集～ 北海道教育委員会 平成 20 年 9 月
- 32) 運動部活動「学校間連携方式」について 札幌市
教育委員会 札幌市教育委員会ホームページ
- 33) 田代 浩一 静岡県東部高体連陸上競技専門部の
取り組み 合同練習がもたらす質的活性化 平成
29 年度全国高等学校体育連盟研究大会紀要 101-
107